舌に発生した骨性分離腫の1例

高山 真一・橋本 温・上野 純子
伊藤 千鶴・谷岡 博昭

A case of osseous choristoma of the tongue

Shinichi TAKAYAMA・Yutaka HASHIMOTO・Junko UENO
Chizuru Ito・Hiroaki TANIOKA

Key words: osseous choristoma (骨性分離腫), osteoma (骨腫), tongue (舌)

緒 言

舌の骨性分離腫は、硬組織からなるきわめてまれな腫瘍である。1913年 Monserrat¹⁾により舌の骨腫 (osteoma de la langue) として報告されたが、後に Krolls²⁾らにより骨性分離腫 (osseous choristoma) として記載された。著者らは、舌に発生した骨性分離腫を経験したので文献的考察を加えて報告する。

症 例

患 者：33歳 女性。

主 訴：舌の違和感。

既往歴：14歳 上顎洞炎。

家族歴：特記事項なし。

現病歴：昭和61年頃、舌背面に腫瘍と違和感を認め他院を受診、手術を勧められたが妊娠中であったため放置していた。しかし、出産後も違和感が続いたため、昭和64年1月■日に当科を受診した。

現 症：全身所見に特記すべき事項はなかった。口腔内は左側舌体部舌背面に小指頭大の骨様硬で、無痛性の腫瘍を触知した。腫瘍表面粘膜に径2mmのびらんが認められた。所属リンパ節は、左側顎下リンパ節が大豆大1個、可動性であった。

臨床診断：舌良性腫瘍 (写真1)。

処置および経過：平成元年9月■日全身麻酔下にて、炭酸ガスレーザーを用いて腫瘍摘出術を施行した。

摘出物所見：大きさは12×11mmで類球形を呈し、骨様硬であった。表面は平滑で、ほぼ正常粘膜で覆われていた (写真2)。

病理組織学的所見：横紋筋、脂肪組織中に、ハバース

写真1 初診時の口腔内所見

写真2 摘出物

管を含む層板構造を有する緻密骨がみられた (写真3)。
病理組織診断：舌骨性分離腫。

考 察

舌にはさまざまな腫瘍性疾患が好発するが、硬組織からなる腫瘍はきわめてまれとされている。1913年に Monserrat¹⁾により発表されて以来著者らが渉猟し得た報告例では、現在までに国外で41例、本邦においては1938年 牟田ら³⁾の報告以来、本症例を含め20例の計61例である。本疾患は舌の違和感、嘔吐、嚥下困難などを主訴に

愛媛大学医学部歯科口腔外科学教室
(主任：谷岡博昭教授)

Department of Oral and Maxillofacial Surgery,
Ehime University School of Medicine (Chief:
Prof. Hiroaki Tanioka)

受付日：平成4年2月3日

写真3 病理組織像 (H-E 染色)

発見される場合が多いとされている。自覚症状のない場合は口腔内、咽頭、喉頭などの検診の際に偶然発見されることもある。本症例の発生部位は左側舌体部舌背面であったが、著者らが渉猟し得た報告例では舌における発生部位は、舌根部22例、舌盲孔10例、有郭乳頭20例、舌体部4例、舌尖部1例、発生部位の不明なものが4例であり、いずれも舌背面であった。年齢では、5～73歳にわたり各年齢層に広く分布しているが、20歳代がもっとも多く25例であった。本症例も29歳の時に症状が出現していた。性別でも本症例のごとく61例中女性44名と圧倒的に女性に多くみられた。また、摘出後の再発の報告は1例のみで、本症例も手術から1年を経たが再発はなく経過良好である。なお、他家の報告例では有茎性の球状を呈しているものが多かったが、本疾患では視診にて舌表面に全く腫瘤は認められなかった。本症例との鑑別疾患としては線維腫、神経線維腫、脂肪腫、乳頭腫、神経鞘腫、血管腫、リンパ管腫、顆粒細胞腫、結核さらには舌癌などがあげられる。

病理組織学的に舌の骨性分離腫は一般的特徴として被膜上皮下の結合組織によって囲まれた球状、結節状の骨組織よりなり、層板構造を示し、そのほとんどがハバース管を有する緻密骨よりなっている。本例も層板構造を示しハバース管を有する緻密骨であった。

本疾患は、Monserat¹⁾の報告以来骨腫として扱われていたが、Krolls ら²⁾が、検討した結果骨腫は骨と関連性のある部位に生じた骨性増殖をさすものであり、舌に発生する骨性変化が本来存在すべき組織からかけ離れた

ものであることから、骨性分離腫という名称を提唱している。われわれもこれに従い同様の名称を採用した。

発生原因についても、鰓弓残遺説¹⁾、上顎体説⁴⁾、先天性奇形説⁵⁾、リンパ組織の骨化説⁶⁾、舌骨・下顎骨の分離説⁷⁾、骨化を伴う変性線維腫説⁸⁾、舌甲状腺の骨化説⁹⁾、その他慢性炎症や外傷に基づく化生説¹⁰⁾など、多く述べられているがはっきりした見解はないようである。

結 語

今回、われわれは33歳女性の舌に発生した骨性分離腫の1例を経験したので文献的考察を加えて報告した。

本論文の要旨は、第35回日本口腔外科学会総会（1990年10月、岡山）において発表した。

引用文献

- 1) Monserrat, M.: Ostéoma de la langue. Bull Soc Anat 88: 282-283 1913.
- 2) Krolls, S.O., Jacoway, J.R., et al.: Osseous choristoma (osteomas) of intraoral soft tissues. Oral Surg 32: 588-595 1971.
- 3) 牟田哲三郎, 緒方 健: 舌根部骨腫症例追加. 耳喉 11: 1016-1018 1938.
- 4) Hirsh, O.: Knochentumor am Zungenrund. Monatsschr Ohrenheilkd Laryngorhinol 59: 496 1925.
- 5) Zuckerman, M.: Ein Fall von Osteom der Zunge. Z Hals-Nas-und Ohrenheilkd 25: 118-120 1929.
- 6) Magnien and Perrot, M.: Un Cas d' Osteome de la Langue. Ann Anat Pathol 10: 331-334 1933.
- 7) Jung, G.: Über ein Osteom der Zunge. Beitr Klin Chir 154: 167-168 1931.
- 8) Grieg, D.M.: Osteoma of the tongue. Critical Review Edinburgh Med J 39: 93-104 1932.
- 9) McClendon, E.H.: Lingual osseous choristoma. J Oral Surg 30: 39-44 1975.
- 10) Roy, J.J. and Klein, H.Z.: Osteochondroma of the tongue. Arch Pathol 89: 565-568 1971.